

# 第15章

## 世知原の歴史と文化財



世知原の位置

### この地域の小中学校

小学校：世知原小学校

中学校：世知原中学校

## 第15章 世知原の歴史と文化財

### 自然豊かなお茶の里

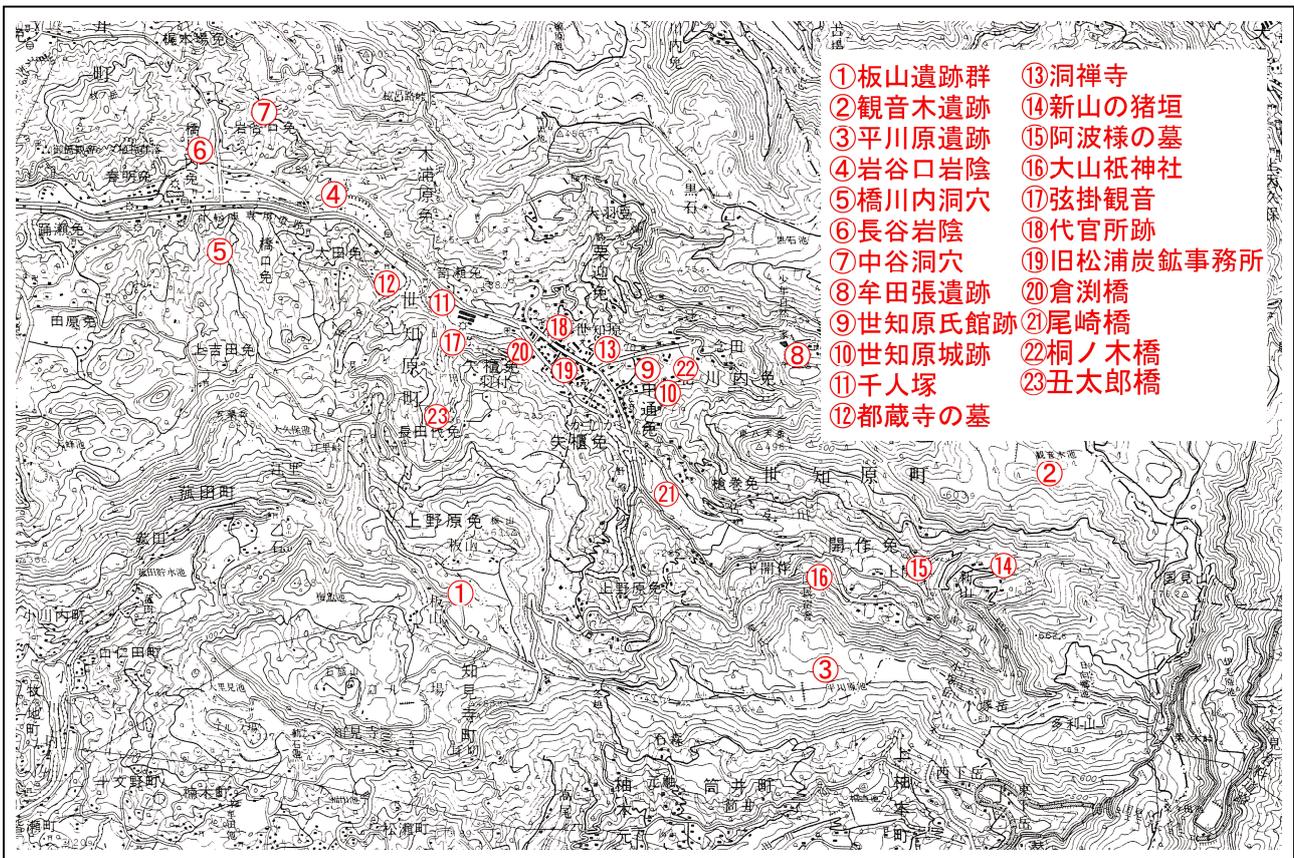
世知原は佐世保市の北部、<sup>1</sup>長崎県最長の川である佐々川の上流域に位置する自然豊かな町です。町は、県北で<sup>2</sup>最も高い山、国見山(標高777メートル)を源流とする佐々川によって造られた、佐々谷を中心に広がっています。

かつては炭鉱の町として有名でしたが、炭鉱が閉山した今では、涼しい気候と降水量の多さを利用したお茶の栽培が有名です。この「世知原茶」は品質が良く、全国の品評会ではたびたび上位入賞を果たしています。



世知原市街地を望む

- 1 長さ21.9キロメートル。2位は本明川(諫早市)の21.1キロメートル、3位は相浦川の20.1キロメートル。  
2 長崎県でもっとも高い山は平成新山で標高1486メートル。



世知原の地図

## 石器時代の狩場

合併まで、佐世保市と世知原町の境界だった板山峠  
 一帯には、後期旧石器時代（約25,000年前～15,000年  
 前）の遺跡が多く、大量の石器が見つっています。<sup>3</sup>板  
 山峠から石盛岳（標高465メートル）にかけては、なだらかな  
 地形が続く広い台地となっているため、旧石器人たちに  
 にとって格好の狩場だったと考えられます。そのため、旧石  
 器人たちは何千年もの間、<sup>4</sup>繰り返し板山一帯にやってき  
 て、たくさんの遺跡を残したのです。



板山遺跡の旧石器  
 佐世保市博物館島瀬美術センター所蔵

- 3 このあたりは、数百万年前に火山活動によってできた溶岩台地である。地形がなだらかなのはそのため。  
 4 旧石器時代の人々は、狩りをしながら動物を追って移動するという生活をしていた。



観音木遺跡

また、国見山から伸びる尾根には、観音木池、平川原池  
 など多くの溜池があります。これらの溜池が造られたのは江戸  
 時代より後のことで、溜池が造られる前は湧き水が多い  
 湿地でした。このような湿地には水を求めて動物たちが集ま  
 り、さらに、その動物たちを求めて旧石器人や縄文人たちも  
 やってきました。現在池となっているこれらの場所は、彼らの  
 狩場だったのです。彼らは、動物が多い季節になるとこのあ  
 たりまでやってきて、しばらくキャンプをしながら狩りをしてい  
 たと考えられます。

## コラム～観音木池～

観音木池は標高630メートルと、県内で最も高い場所にあ  
 る溜池である。この辺りは山深いため開発も進まず、アカガシ  
 の原生林が残り、珍しい両生類「ブチサンショウウオ」の生息  
 地があるなど、原始の自然をよく留めている地域である。

石器時代人はこのあたりでよく狩りを行っていたようで、池  
 の周辺からはたくさんの石器が発見されている。また、いつの  
 時かわからないが、タタラ製鉄が行われていたらしく、フィゴの  
 羽口や製鉄屑などが発見されている。



アカガシの原生林

※写真提供：ふるさと自然の会

また、この周辺で炭焼きをしていた人たちの間には次のようないい伝えがある。

「…観音木のあたりは昔『うば捨て山』で、開拓に入った人々が生活に困って老人たちを山  
 に捨てたという。そして、老人が捨てられたところに炭焼窯を築くとたたりがあり、原因不明の高  
 熱に苦しめられる。…」

原始の自然と狩場、タタラ製鉄、うば捨ての伝説…。現在ではめったに人が立ち入ることのない、まさに「深山幽谷」という雰囲気のある観音木池。この池は、澄んだ水とともに悠久の昔からの人類の歴史も湛えているのである。

5 長崎県内では国見山と多良岳にしか生息していない。

6 砂鉄と木炭を使った古代製鉄法。非常に硬い鉄ができる。一般的に刀はタタラ製鉄で作る。

## 佐々谷の洞穴遺跡

相浦谷と同じように、佐々谷にも洞穴遺跡がたくさんあります。特に、世知原の中心部からやや下流の岩谷口地区や、吉井の橋川内地区には洞穴遺跡が集中しています。岩谷口地区には、岩谷口第1、第2岩陰、中谷洞穴、長谷洞穴が、橋川内地区には橋川内洞穴があります。

このうち、長谷洞穴を除いて発掘調査が行われていて、岩谷口第1、第2岩陰と橋川内洞穴が縄文時代早期(約8,000年前)から後期(約3,000年前)にかけて利用されていたことがわかりました。人々は普段はこのあたりの洞穴で生活し、狩りの季節になると動物の多い観音木や、平川原に出かけて狩りを行っていたと考えられています。

洞穴や岩陰は、縄文時代の後期頃から次第に利用されなくなり、弥生時代以降になると、中谷洞穴で短期間の利用があったほかは、ほとんど生活には利用されていません。弥生時代以降には、洞穴や岩陰はお墓や祭り、信仰の場として利用されたようで、岩谷口第2岩陰からは、古墳時代(約1,600年前)の銅鏡が出土しています。



岩谷口第1岩陰



中谷洞穴



橋川内洞穴(市指定史跡)



岩谷口第2岩陰

## 弥生時代の世知原

縄文時代の終わり頃から弥生時代にかけて、人々はそれまでの洞穴や小さな集落を捨てて、平地や小高い丘の上に大きな集落を作るようになります。これは、縄文時代に多い小グループでの狩猟・採集という生活から、集団での農耕へと生活スタイルが変化したためです。農耕を行うには平らな広い土地と人手が必要となるため、平地や丘の上に大きな集落を作るようになったのです。



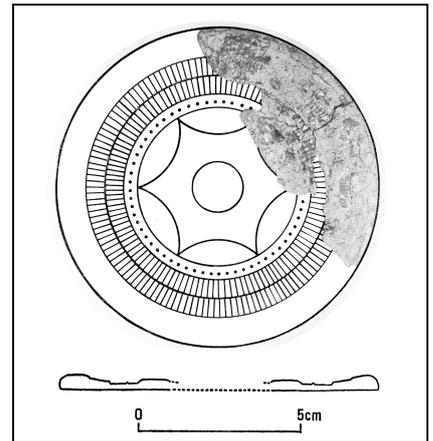
木浦原の茶畑

世知原では、少年自然の家がある赤木場一带や、広いお茶畑が広がる木浦原一带に弥生時代の集落があったようで、たくさんの弥生土器や石器が見つかっています。特に、木浦原からは石を磨いて作った珍しい「7石剣」が見つかっています。

7 剣の形をしているが、武器としてより、祭りの道具に使われたと考えられる。

## 世知原の懸仏

古墳時代(約1,600年前)の世知原には、岩陰で祭祀を行う人々がいたということが、岩谷口第2岩陰から出土した銅鏡によって分かっています。しかし、それ以降から平安時代(約1,200年前)にかけての世知原の様子を物語る資料は一切無く、どこに、どのような人々が暮らしていたのかは、全く分かっていません。



岩谷口第2岩陰出土の銅鏡→



世知原の懸仏

鎌倉時代(約800年前)の世知原は、吉井にあった直谷城の城主<sup>8</sup>志佐氏の領地でした。そして、鎌倉時代に日本中を震え上がらせた「元寇」の時には、志佐氏親子も出陣して鎌倉幕府から褒美を与えられています。

筥瀬地区には、1291年(正応4)に作られた「懸仏」が伝わっています。この「懸仏」は元寇の記憶もまだ新しい頃に作られています。ひょっとすると、人々はこの「懸仏」に元寇が二度と起こらないように祈ったのかもしれない。

この「世知原の懸仏」は、製作年代の分かる貴重な資料として長崎県の文化財に指定されています。

8 宗家松浦氏から分かれた分家。吉井の直谷城を本城として、吉井、世知原、志佐(松浦市)を領有していた。

9 1274年(文永11)、1281年(弘安4)の2度にわたるモンゴル軍の襲来。

## 世知原氏と都蔵寺氏

鎌倉時代から室町、戦国時代にかけて世知原を領有していたのは、直谷城主の志佐氏であることは先にも述べましたが、実際に土地を治めていたのは、志佐氏の家臣である百枝氏(後の世知原氏)と都蔵寺氏という2つの豪族でした。

百枝氏は、長く世知原を治めていたので「世知原殿」とも呼ばれていました。百枝氏もまた「世知原」を名乗ることがあり、室町時代の1395年(応永2)に、洞漸寺の開基(お寺を建てた人)として「世知原市正」の名前が出てきます。百枝氏は長い間世知原を治めているうちに名前を変え、「世知原氏」となったようです。



世知原氏館(左)と世知原城跡(右)

世知原氏は、普段は中通地区に築いた館(世知原氏館)で暮らし、敵が攻めてきた時には、その館を見下ろす城山地区に築いた山城(世知原城)に立て籠って戦いました。このような城は、「逃げ城」や「詰め城」と呼ばれ、戦国時代には普通にみられます。世知原城跡は、炭鉱開発や宅地開発などで大部分が失われてしまいましたが、世知原氏館跡には館を取り囲む石塁が残っており、現在でも世知原氏の子孫の方が住んでいらっしゃいます。

一方の都蔵寺氏は太田地区に館と城を構えていましたが、代々志佐氏が肥前神埼(現在の佐賀県神埼郡)に持っていた領地(元寇の褒美として与えられた土地)の城代を務めていました。この土地は、戦国大名として急成長していた龍造寺氏の領地内に孤立していたため、たびたび攻撃を受けました。しかし都蔵寺氏も勇敢に戦い、何度も撃退しましたがついに力尽き、城代の都蔵寺播磨守、玄蕃親子と城兵700人は、1人残らず戦死したといわれています。

世知原に残された都蔵寺氏の家来たちは、都蔵寺氏の親戚の養子(後の都蔵寺式部)を新たな領主として迎え、都蔵寺氏はその後も存続することができました。

## 筥瀬祝原の合戦

佐賀で龍造寺氏が勢力を伸ばしていた頃、北松浦地方では、平戸松浦氏が勢力を伸ばし、島原の<sup>10</sup>有馬氏や大村の<sup>11</sup>大村氏と争いを繰り広げていました。世知原を領有していた志佐氏もまた、有馬氏と平戸松浦氏の争いに巻き込まれてしまいます。(第14章吉井参照)

10 島原半島一帯を支配していた戦国大名。

11 大村を拠点に主に県央を支配した戦国大名。



千人塚



箭瀬免の薬師如来及び十二神将像

1581年(天正9)12月、有馬の軍勢300人が直谷城を夜襲し、占領してしまいます。そして城主志佐純意の次男豊寿丸を人質としてしまいました。このことを知った志佐方の武将世知原修理と都蔵寺式部は、帰国途中の有馬軍を箭瀬祝原で待ち伏せ、激しい戦いになりました。この戦いで平戸松浦氏からの援軍もあり、人質となっていた豊寿丸を奪い返すことに成功しました。

激戦地となった箭瀬地区の祝原には、このときの戦死者の霊を祀った「千人塚」が築かれ、太田地区には、「十二薬師・大林寺」が建てられて「薬師如来像」と「十二神将像」が奉納されました。このうち「十二神将像」には天正20年(1592)の銘が入っているものがあり、一体も欠けることなく伝わっている貴重なもので、佐世保市の文化財に指定されています。また、平戸松浦の軍勢が有馬軍に弓を射かけた山を「弦掛山」と呼ぶようになりました。

この戦いの後、志佐氏は平戸松浦氏の家臣となり、世知原は平戸松浦氏の領地となりました。

1592年(文禄元)に始まった豊臣秀吉による<sup>12</sup>朝鮮出兵では、世知原修理と都蔵寺式部も平戸の松浦鎮信の配下として出陣しています。その後、世知原修理は朝鮮で病死し、都蔵寺式部も1598年(慶長3)に日本に帰ってきてから亡くなりました。式部と式部の妻の墓は太田地区にあり、「都蔵寺の墓」として佐世保市の文化財に指定されています。



都蔵寺の墓

12 天下統一を果たした豊臣秀吉が、明国(中国)を征服しようと朝鮮半島に出兵した事件。1592年(文禄元)、1597年(慶長2)の2度行われた。出兵した諸大名は陶工など多数の技術者を連行した。朝鮮では壬申・丁酉の倭乱と呼ぶ。

## 江戸時代の世知原

江戸時代の世知原は平戸藩に属する農村です。世知原には、5ヵ村(横辺田、福井、世知原、鷹島、福島)を治める代官所が置かれていました。代官所は旧世知原町役場の前にあって、ここで裁判や<sup>13</sup>年貢の取り立てなどを行っていました。

江戸時代には、どこの藩でも年貢の収入を増やそうと開拓が進められます。もちろん、世知原でも盛んに開拓が行われました。

13 今の税金。当時は米などで納めていた。



いわやぐち すいろ  
岩谷口の水路トンネル

開拓には水が必要ですから、そのための水路や溜池も造られています。観音木池もこの頃造られました。また、太田地区から岩谷口地区にかけての佐々川沿いには、岩壁を削って2キロメートルにも及ぶ水路が造られました。この水路は1757年(宝暦7)に開通し、約100年後の1855年(安政2)に拡幅工事が行われています。どちらも相当な難工事だったようで、今でもノミの痕や足場を組むための穴などが残されています。この水路は改修されながら現在でも使われており、岩谷口地区の田畑を潤しています。

### かいさくちく かいたく 開作地区の開拓

佐々川の最上流域の深い谷間に「開作」という集落があります。世知原にある集落の中でも最も標高の高いところにあり、冬になると雪に閉ざされることもあります。

この谷を開拓したのは、阿波の国(徳島県)からやってきた人々だったと伝えられています。開作で最も古い寛保3年(1743)の銘がある墓は「阿波様」と呼ばれており、明治の初め頃までは実際に阿波の方言を使う人が住んでいたといわれています。



ゆき かいさくだに  
雪の開作谷



かいさくだに  
開作谷



あわさま はか  
阿波様の墓

開作谷を開拓して住み着いた人々は、平家の落人だったとか、関ヶ原の戦いに敗れた落武者だったとか伝えられていますが、はっきりしたことは分かっていません。いずれにしても、全くの無人の地であった深山に入り、土地を切り開いて定着するまでには、大変な苦労があったに違いありません。その苦労を偲ばせる「<sup>14</sup>猪垣」が開作の新山地区に残っています。この土地を開拓した人々は、厳しい自然環境や、動物たちと闘いながら、今日に至るまでの生活の基盤を築いていったのです。

ちなみに、「開作」という地名は「新田」を意味し、文字通り「開拓して田畑を耕作する」ということで、西日本を中心に1600年代の後半頃から増えてくる地名です。

<sup>14</sup> 猪や鹿などの動物が田畑に入ってこられなくするための石垣。

## 世知原の浮立

佐世保市には、「<sup>15</sup>浮立」と呼ばれる民俗芸能が各地に伝えられています。世知原でもかつては開作、檜巻、北川内、木浦原、岩谷口の5集落で行われていましたが、戦争や都市化の影響で次第に行われなくなり、現在では、浮立としての形がきちんと残っているのは「北川内浮立」だけで、佐世保市の文化財に指定されています。



北川内浮立

黒髪地区に伝わっている県指定無形民俗文化財「木場浮立」(第2章日宇川流域参照)は、西有田(現在の佐賀県西松浦郡)の龍泉寺から伝わったものですが、この北川内浮立は伊万里の楠久にある神社から伝えられたもので、練習中に分からないところがあると、伊万里まで聞きに行っていたそうです。北川内浮立がいつ頃から行われていたのかははっきりしていませんが、伊万里に聞きに行ったという話が伝えられていることからそれほど古いことではなく、江戸時代末期頃ではないでしょうか。

15 鉦や笛などの賑やかさが、身も心も浮き立つことから「浮立」となった、あるいは「風流」がなまって「浮立」となったといわれている。もともと雨乞い行事の一種だが、娯楽として演じられることもあった。

## 炭鉱の街として

県北地区にはかつて、「北松炭田」と呼ばれた大規模な炭鉱がありました。石炭は「黒いダイヤ」と呼ばれ、明治時代から昭和40年代にかけて日本の経済を支えた貴重な資源でした。

世知原では1891年(明治24)に石炭の採掘が始まりました。最初の炭鉱は国見炭鉱といい、今の城山団地の近くにありました。国見炭鉱の採掘が始まった2年後の、1893年(明治26)に開鉱した松浦炭鉱は順調に成長を続け、世知原の近代炭鉱の基礎を作りました。



炭鉱全盛期(昭和30年代)の世知原



陸蒸気(蒸気機関車)

世知原炭鉱資料館所蔵

松浦炭鉱はさまざまな炭鉱用の施設を建設しましたが、中でも重要な施設は、1898年(明治31)に開通した松浦炭鉱鉄道です。世知原、佐々間を結んだこの鉄道は、「陸蒸気」と呼ばれて珍しがられ、周辺の村々からたくさんの方が見物に訪れました。松浦炭鉱はその後も発展を続け、高島炭鉱に次いで県内第2位の炭鉱となるまでに成長しました。

現在、世知原の炭鉱やふるさとのあゆみを展示している「世知原炭鉱資料館」は、もともと松浦炭鉱という会社が1913年（大正2）頃に建てた事務所でした。砂岩の切り石を使った大変立派な建物だったので、わざわざお弁当を持って見物に訪れる人もいたそうです。この建物は県北地区に残る唯一の石造りの洋館で、長崎県の文化財に指定されています。



世知原炭鉱資料館（旧松浦炭鉱事務所）

### 世知原各地に残る炭鉱時代の面影



ホッパー跡

※掘り出した石炭を貨車に積む施設



坑口跡（旧三坑）



ボタ山（かじか運動公園）

※石炭以外の石や泥を積んだ山

### 炭鉱と人口の移り変わり

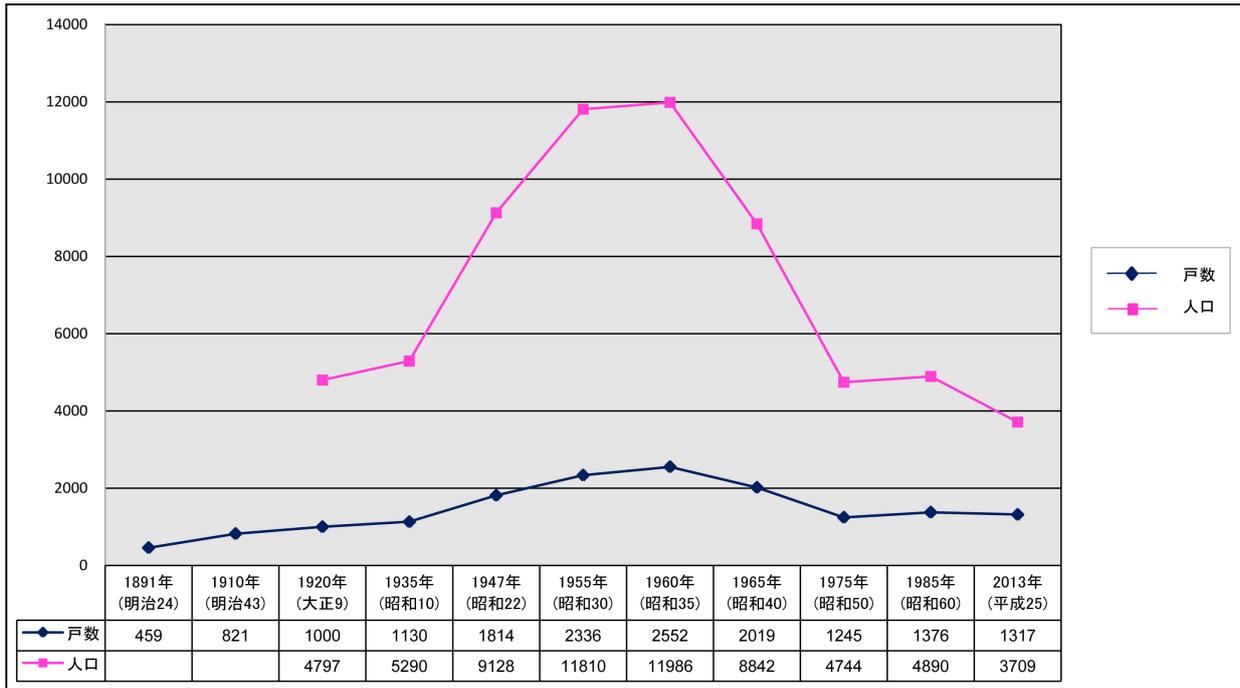
炭鉱の発展と共に世知原の人口も増え続け、石炭の採掘が始まった1891年（明治24）には459戸だった戸数が、1912年（明治45）には821戸とほぼ倍になっています。その後も人口は増加し続け、炭鉱が最盛期を迎えた1960年（昭和35）には、2,552戸、11,986人が住んでいました。

しかし、1960年代になると、それまで石炭が中心だったエネルギー源が、石油に急激に変化するという「エネルギー革命」が起こります。さらに、外国から安い石炭が大量に輸入されるようになると、日本国内の炭鉱は経営が苦しくなり、次々に閉山していきました。

松浦炭鉱も「エネルギー革命」の波には逆らえず、1970年（昭和45）に閉山し、79年におよぶ世知原の炭鉱の歴史に幕を下ろしました。

炭鉱の閉山後人口は急激に減少し、1960年から1970年までの10年間で7,000人以上の人が世知原を離れました。その後は小幅な増減を繰り返し、現在（平成25年）では3,795人が世知原に住んでいます。

16 2002年（平成14）には年間約1億5900万トンの石炭を輸入している。そのうち半分以上がオーストラリアからの輸入。



世知原の戸数と人口の移り変わり

## 世知原の石橋群

炭鉱と並んで世知原の近代化を象徴するものに「石橋」があります。世知原は県内でも指折りの石橋集中域で、現在17橋が残っています。これは、長崎市の24橋について県内2番目の多さです。なぜ世知原にはこんなにたくさんの石橋が造られたのでしょうか。主な理由として次の3つがあげられます。

一つ目は、炭鉱の発達でした。石炭を積んだトロッコは大変重いため、それまでの木橋や土橋では傷みが早く、すぐに架け替えをしなくてはなりません。そのため、一度架けると100年以上は使える石橋が架けられるようになったのです。

二つ目は、世知原には石材が豊富にあり、さらに、その石材を加工する技術を持った石工がたくさんいたことです。世知原の古い農家などは高い石壁を築いているところが多く、石橋とともに石材加工技術の高さを今に伝えています。

三つ目は、石橋の建設を推進した人物の存在でした。この人物については次の「郷土の人」の項で詳しく述べることにしましょう。



世知原最大の石橋「倉瀬橋」



最も保存状態の良い「桐ノ木橋」

世知原石橋群は、主に明治後期から昭和初期にかけて架けられたもので、江戸時代からの伝統的な技法で架けられた橋と、明治以降に導入された近代的な技法によって架けられた橋が混在しているという特徴があります。また、2種類の石材で造った橋（倉渕橋、祝橋）や、自然石をそのまま使った橋（丑太郎橋）、「輪積」と呼ばれる珍しい技法を用いた橋（尾崎橋）など、個性豊かな石橋が多いことも世知原石橋群の特徴です。



珍しい輪積技法を用いた「尾崎橋」

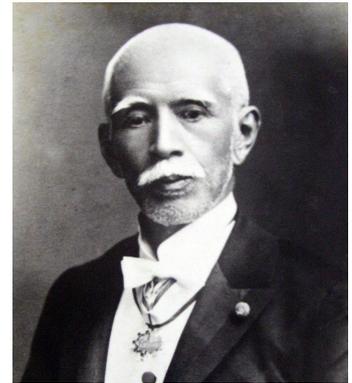


自然石を組み合わせた「丑太郎橋」

### 郷土の人～中倉万次郎～

前の項で少し触れた石橋の建設を推進した人物で、世知原の近代化を語る上で欠かせない人物が、中倉万次郎(1849～1936)です。

1849年(嘉永2)、現在の佐世保市吉井町に生まれ、世知原の中倉家で育った万次郎は、若くして平戸藩松浦家に仕えました。明治維新後は17自由民権運動に参加し、1883年(明治16)には35歳の若さで長崎県会議員となりました。万次郎は特に交通網の整備に力を入れ、木橋や土橋が多かった時代に石橋の建設を推進し、注目を集めました。世知原をはじめとする県北地区に石橋が多いのはこのためです。



中倉万次郎

その後、1902年(明治35)の世知原村長在任中に帝国議会(今の国会)議員に立候補し、当選を果たしました。国会議員となった万次郎は、県北地区の交通と産業の発展のために力を尽くし、多くの功績を残しました。その中でも特に大きな功績が、佐世保、伊万里間を結ぶ鉄道「伊佐線」の建設でした。

万次郎は伊万里出身の実業家松尾良吉(1857～1932)らとともに先頭に立って伊佐線の建設を押し進め、1918年(大正7)には佐世保軽便鉄道株式会社を設立して50キロメートルに及ぶ18軽便鉄道を建設しました。この鉄道は、石炭輸送や住民の交通に大きく貢献しました。

17 明治時代前期、板垣退助らが中心となり、政府に対して国会開設など民主主義的改革を要求した政治運動のこと。

18 線路の幅が狭く(普通の鉄道は1067mmあるが、軽便鉄道は762mmしかない)、スピードも遅いが、鉄道に比べて安く簡単に建設できるため、明治時代に全国に普及した。



中倉万次郎翁頌徳碑

万次郎が描いた「伊佐線」の構想が完全に実現したのは、建設が決まってから35年経った1945年(昭和20)のことでした。

彼は1924年(大正13)に国会議員を引退しましたが、その後も平戸島電灯株式会社の設立や、長崎港修築調査委員を務めるなど、郷土の発展には常に気を配っていました。

万次郎の偉大な功績とその人柄は多くの人から慕われ、1936年(昭和11)に88歳で亡くなった時には、世知原では村葬が営まれました。また、彼の功績を称え、佐世保市や北松浦郡内の人々の寄付により、大頌徳碑が建てられました。

### コラム～石橋こぼれ話～

世知原には16基のアーチ式石橋が現存しているが、かつては30橋以上あったという。さて、これらの石橋はどのようにして架けられたのだろうか？

まず、石橋を架ける場所に木材で「支保工」と呼ばれるアーチを造り、支保工の両側から「輪石」(アーチストーン)と壁石を組んでいく。アーチは、頂上部分に「要石」(キーストーン)をはめ込んで支保工を外せば完成する。支保工を外すと、輪石は重力によりしっかりとかみ合わされ、きれいなアーチができる。そして、アーチの上に壁石を積み上げれば橋は出来上がる。



若敷橋

2003年(平成15)に、世知原中学校の生徒たちが完成させた「若敷橋」もまったく同じ方法で造られた。世知原で最も新しい石橋である。



曲川橋

ところで、石橋のアーチ部分は橋全体の重さを支えなくてはいけないため大変頑丈にできている。そのため、奥ノ口橋のように、水害などで壁石が流されても輪石だけ残る場合がよくある。

また、岩谷口地区の佐々川支流に架かる前原橋、曲川橋、岩下橋の3橋は、ほとんど同じ規模、同じ形式の橋だが、これらの橋には設計図はなく、神社の境内に実物大のアーチ図を描いて、厚紙を切ってアーチに並べ、その紙をあてて石を加工したという証言がある。この3橋は1927年(昭和2)の完成であるが、昭和に入ってもこのような技法が用いられていたとは驚くべきことだ。

ち い き ね ん び ょ う  
地域 の 年 表

時 代	出 来 事
旧石器時代	約20,000年前 板山一帯で盛んに狩りが行われる。
縄文時代	約8,000年前 観音木、平川原一帯が狩場となり、岩谷口、橋川内などの洞穴遺跡に人々が暮らした。
弥生時代	赤木場や木浦原に集落ができる。
古墳時代	岩谷口第2岩陰で鏡を使った祭祀が行われる。
鎌倉時代	
1291年(正応4)	世知原の懸仏が作られる。
室町時代	
1395年(応永2)	世知原市正が洞漸寺を建てる。
戦国時代	
1581年(天正9)	箭瀬祝原の合戦が起こる。
1592年(天正20)	十二薬師・大林寺が建てられ十二神将像が奉納される。
1592年(文禄元)	朝鮮出兵。世知原修理、都蔵寺式部出陣。
～1597年(慶長2)	
江戸時代	
1743年(寛保3)	開作に阿波様の墓ができる。(開作地区の開拓)
1757年(宝暦7)	太田から岩谷口にかけての用水路ができる。
1855年(安政2)	用水路の拡張工事が行われる。
近代	
1874年(明治7)	開知小学校開校。
1891年(明治24)	石炭の採掘がはじまる。
1898年(明治31)	松浦炭鉱鉄道開通。
1913年(大正2)頃	松浦炭鉱事務所完成。(現世知原炭鉱資料館)
1918年(大正7)	世知原に初の電灯がともる。倉淵橋完成。
1933年(昭和8)	国鉄世知原線開通。
現代	
1958年(昭和33)	町制施行。世知原町誕生。
1970年(昭和45)	飯野炭鉱松浦炭業所閉山。世知原の炭鉱が消える。
1971年(昭和46)	国鉄世知原線廃線。
1986年(昭和61)	「全町公園化の町」宣言。
2005年(平成17)	佐世保市と合併。佐世保市世知原町となる。